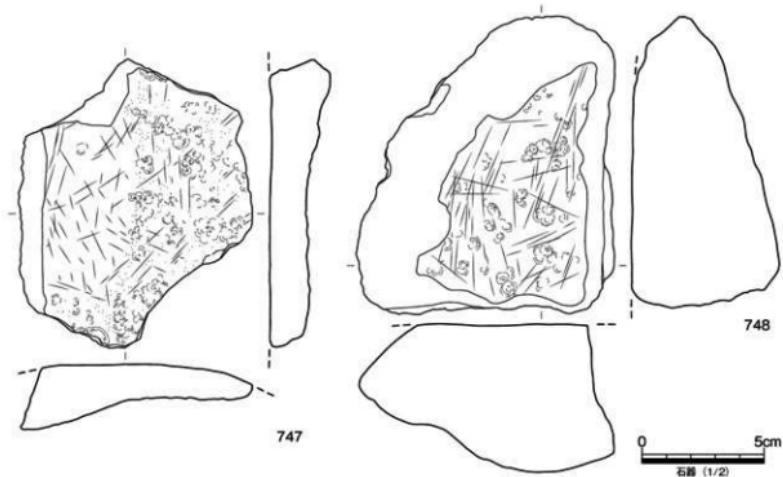


第113図 SD31 平・断面・出土遺物実測図1



第114図 SD31出土遺物実測図2

SD30（第112図）

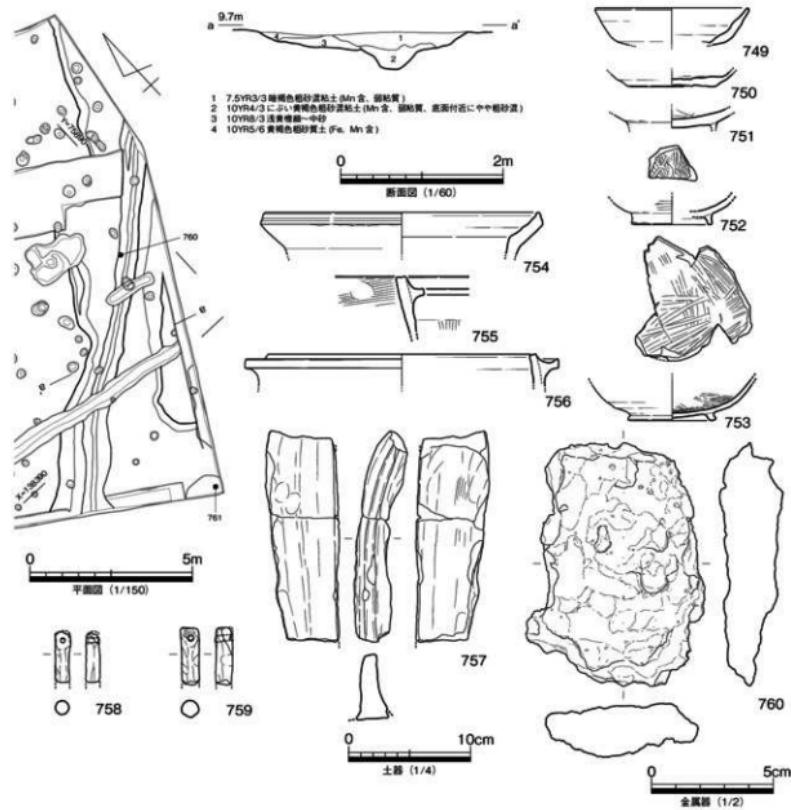
8区東端部第2面で検出した南北溝である。南北両端はSK61・SK65に切られ、SK65以南で延長部は確認していない。延長約10.7mを検出した。溝は、検出面幅0.24～0.40m、残存深0.06～0.27m、断面形はU字状ないし箱形を呈する。調査区内でやや東に湾曲するものの、流路方向は概ねN 114°Eに配される。埋土は灰黄褐色粗砂質土の単層で、ブロック土がやや多量に含まれることから、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。流路底面の標高は、南端部で9.23m前後、北端部で9.10m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が考えられる。

遺物は、弥生土器鉢、須恵器杯、土師質土器皿・杯、瓦器、瓦質土器等の小片約80点が出土した。720・721は土師質土器杯である。

SD31（第113・114図）

11区南端第2面で検出した東西直線溝である。西端は調査区内で途切れ、東端は調査区外へ延長し、9.39mを検出した。SB15と重複し、切り合い関係よりSB15より先行する。溝は、検出面幅0.43m前後、残存深0.10～0.15mを測り、断面形はU字状を呈する。流路方向はN 80.8°Wに配され、北に位置するSB12の主軸方向と概ね合致し、位置関係からもSB12の雨落ち溝もしくは区画溝の機能が考えられる。埋土は、黄灰色粗砂質土の単層で、ブロック土を多量に含むことから、遭構廃絶時に人為的に埋め戻されたのであろう。底面の標高は、西端部で9.27m前後、東端部で9.5m前後をそれぞれ測り、高低差より西へ流下していたとみられる。

遺物は、須恵器壺、土師質土器皿・杯・碗・足釜・鍋、黒色土器碗、瓦器碗、瓦質土器火鉢、フイゴ羽口、棒状土錐等の小片のほか、サヌカイト剥片、砂岩礫、鉄滓等がコンテナ1箱出土した。完形に近く復元可能な資料が多い。722～724は土師質土器皿。723は完形品である。楠井編年第Ⅱ期第1段階とみら



第115図 SD32 平・断面・出土遺物実測図

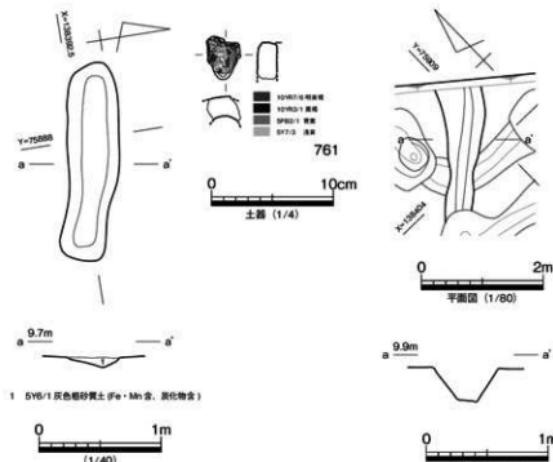
れる。724～727は同杯。728はほぼ完形に近く復元される。727の外底面及び体部下半には煤が付着する。728は和泉型瓦器碗で、尾上編年Ⅲ～Ⅲ期。742は瓦質土器火鉢で、外面口縁部下に3個の花文を押捺する。同一個体と考えられる破片が、8区SK67中層、8区SB03(SP323)より出土している。739・740は土師質土器足釜。いずれも鋸部と体～底部外面は煤が付着する。桶井遺跡第Ⅱ期第2～3段階。741は同鍋である。外面には煤が付着する。746は土師質のフイゴ羽口先端部の小片で、端部にはスラグが付着し、胎土は一部高温により発泡している。745も土師質のフイゴ羽口の小片だが、やや胎土は異なり、746と同一個体かどうかは不明である。744は土師質の棒状土錐片である。743は須恵器壺の底部片で、古代に遡る混入資料である。747・748は砂岩製の砥石で、いずれも現状で上面1面のみ砥面が確認できる。748は破損後転用されたためか、被熱を蒙り、部分的に変色し、層状の剥離等が認められる。

出土遺物より、本溝は13世紀前半頃に埋め戻された可能性が考えられる。

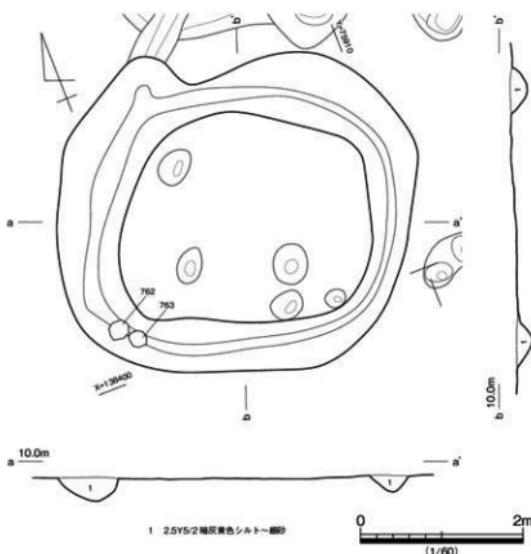
SD32 (第115図)

11区東端第3面で検出した南北溝である。両端は調査区外へ延長し、約11.2mを検出した。掘り方東辺は、南端部で東へ大きく屈曲しており、大半が調査区外となるため断定はできないが、東へ屈曲するか、別の溝が合流する可能性も考えられる。溝は、検出面幅2.14～2.88m、残存深0.45m、断面形は概ね逆台形状を呈する。調査区内で若干蛇行するものの、流路方向はN 50.01°Eに配される。埋土は4層に細分された。このうち上位2層(1・2層)は、下位層(3層)上面より掘り込まれ堆積しており、改修の可能性が考えられる。改修溝底面には、粗砂の堆積が認められるものの、旺盛な流水痕跡は乏しい。底面の標高は、南端部で9.02m前後、北端部で9.17m前後を測り、高低差より南へ流下していた可能性が考えられる。

遺物は、弥生土器高杯、土師器甕・羽釜、甕、須恵器皿・杯・土師質土器皿・杯・碗・足釜、黒色土器碗、棒状土錐等の小片、サヌカイト剥片、鉄滓等が、コントナ1箱程度出土した。出土した遺物の大半は、古代以前に属する弥生土器や土師器、須恵器であり、SR01等下位遺構からの混入資料である。また、小片化した遺物が多く、図化可能な資料は乏しい。

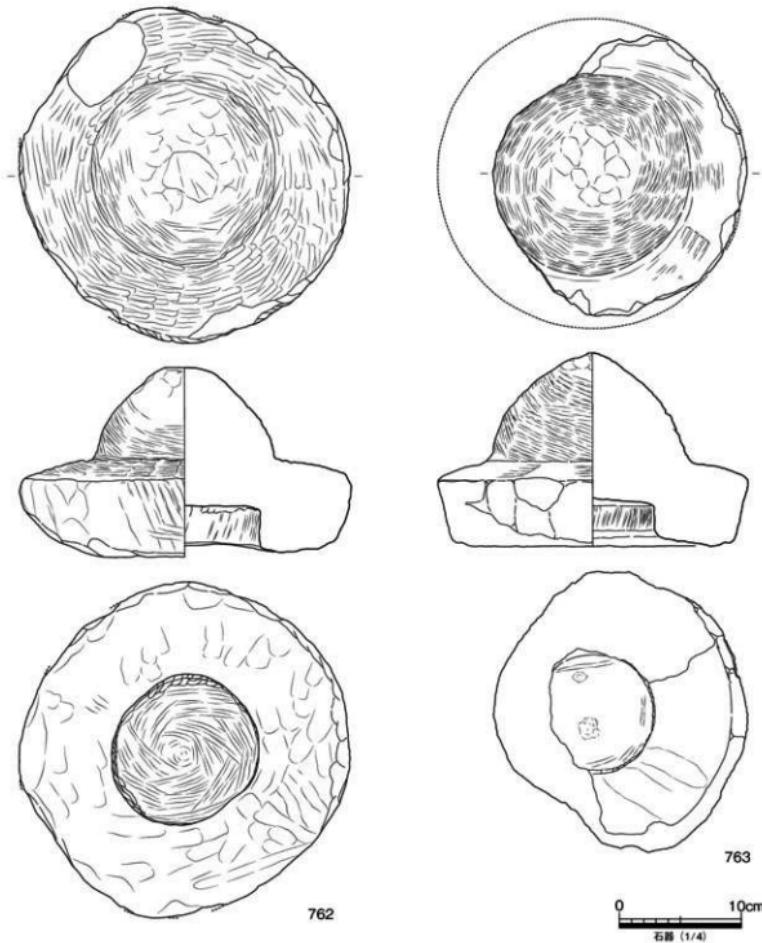


第115図 SD32 (左)・SD34 (右) 平・断面・出土遺物実測図



第116図 SD33 (左)・SD34 (右) 平・断面・出土遺物実測図

749・750は土師質土器皿。

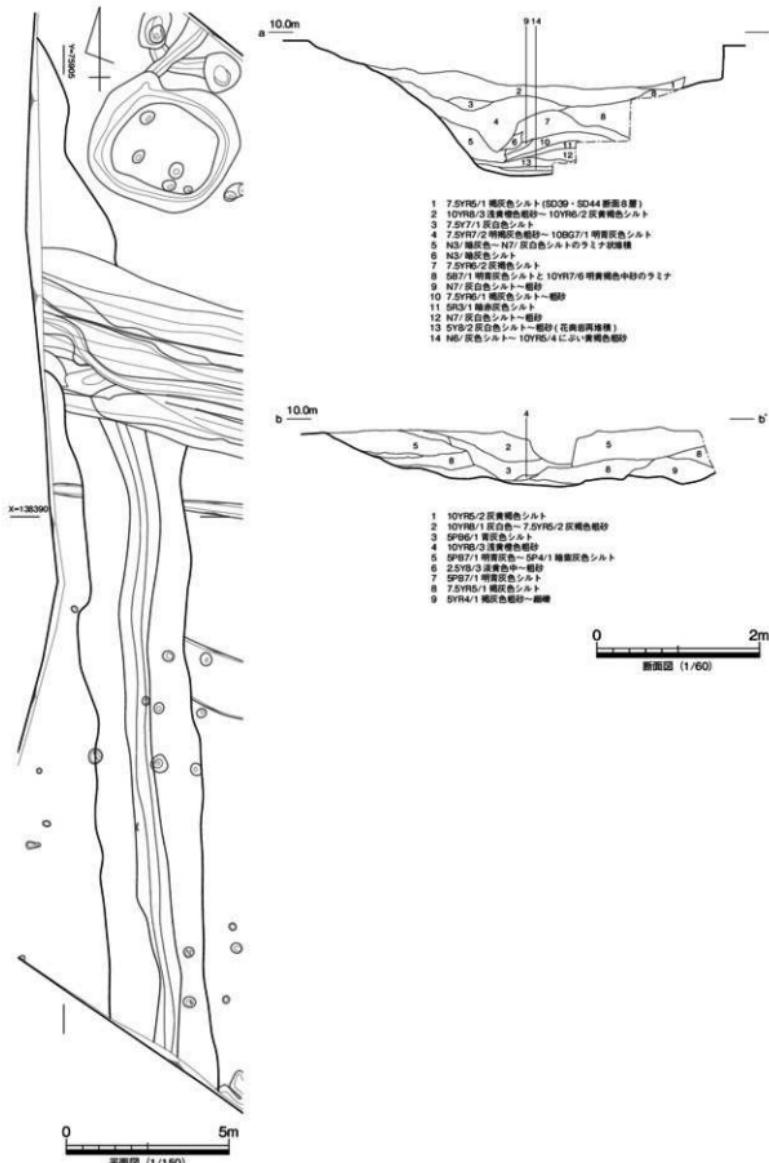


第118図 SD36出土遺物実測図

751～753は黒色土器碗である。751は炭素の吸着に乏しい。754は土師器甕。755・756は土師器羽釜。757は土師器の移動式竈で、焚口鋸部の破片である。内面に煤が浅く付着する。758・759は土師質の棒状土錐片。760は椀形滓である。

SD33(第116図)

8区東端部第2面で検出した小溝である。東西両端は調査区内で途切れ、延長1.62mを検出した。



第119図 SD38 平・断面図

検出面幅 0.41 m、流路方向 N 75.81°W、残存深 0.07 m を測り、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は灰色粗砂質土の単層であった。

遺物は、器種不詳の土器小片 6 点と須恵器小片 1 点が出土したのみである。761 は土師質のフイゴ羽口先端部の小片である。外面には厚くガラス質のスラグが付着する。

SD34 (第 116 図)

3 区北端で検出した南北溝である。北端は調査区外へ延長し、南端は SD36 に切られ、同溝以南で延長は確認されなかった。検出面幅 0.40 ~ 0.68 m を測り、残存深は約 0.29 m であった。埋土等に関する情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、土師器壺、瓦器碗、須恵器杯等の小片のほか、器種不詳の土師質土器の小片が 19 点出土した。

SD36 (第 117・118 図)

3 区北半部で検出した方形周溝である。SD34 と重複し、切り合い関係より後出す。溝は、幅 0.38 ~ 0.87 m、残存深 0.2 ~ 0.3 m で、断面形は概ね U 字状を呈する。溝底面の標高は、9.51 ~ 9.66 m を測り、北辺が浅く、西辺がやや深く掘り込まれている。周溝内側は、東西約 3.0 m、南北約 2.5 m のやや歪な隅丸方形状を呈し、小穴 5 基が認められた。周溝と小穴は整った位置関係になく、有機的な関係はないものと考えられる。埋土は、明灰黄色シルト～細砂の単層であった。

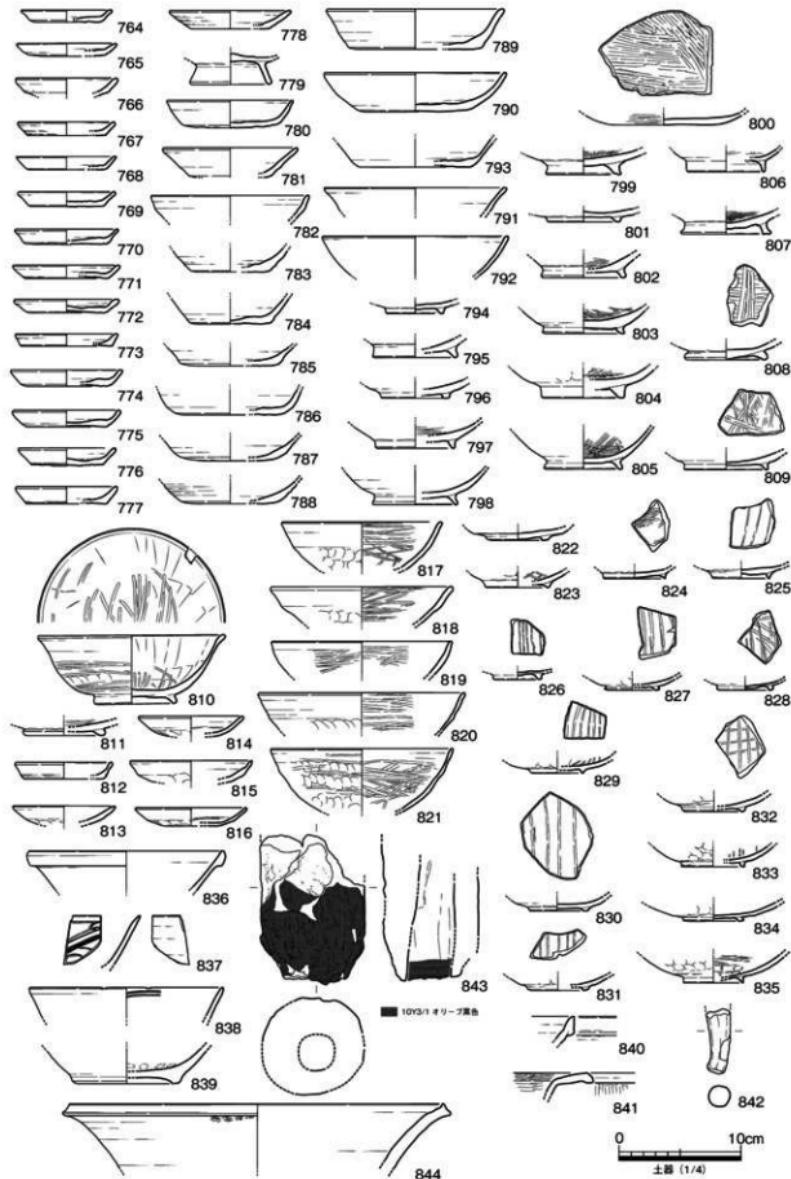
遺物は、土師器壺、土師質土器皿・碗等の小片のほか、器種不詳の須恵器片や角礫凝灰岩小片等が 48 点出土した。762・763 は凝灰岩製（火山石）の宝塔笠部で、平面形は略円形を呈する。2 点の形態や規格は酷似し、ほぼ同時期に製作されたと考えられる。いずれも表面には、幅 3 mm 前後の細かな手斧痕が密に残る。本来は、他の部材と組み合わされて、周溝内の平坦面上に据えられていたと考えられ、2 点出土していることから、2 基の宝塔が樹立されていたのであろう。本遺構については、第 5 章で検討するように、火葬塚の可能性を考える。

SD38 (第 119 ~ 122 図)

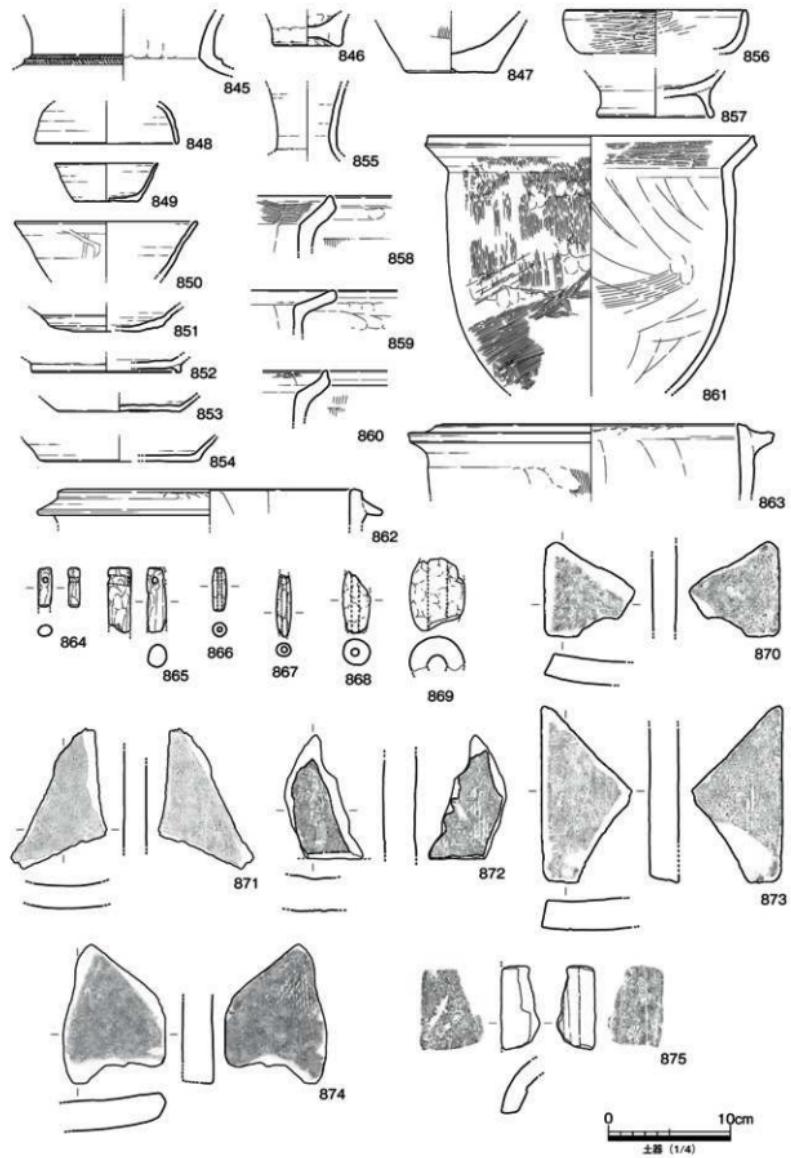
3 区西端部で検出した、緩やかに弧を描いて南北走する大型幹線水路である。南北両端は調査区外へ延長し、27.8 m を検出した。SB16・SB17、SD39・SD42・SD44 等と重複し、切り合い関係よりそのいずれよりも先行する。検出面幅 2.90 ~ 3.23 m、残存深 1.28 ~ 1.58 m、断面形は概ね逆台形状を呈する。底面の標高は、南端部で 8.9 m 前後、北端部で 8.3 m 前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下する可能性が考えられる。

SD38 とされる土層断面図は、調査時に 2 箇所で作成しているが、作成位置の記録は行なえていない。最深部標高から断面 a は北端付近、断面 b は南端付近と推測するが、b は最深部標高 9.15 m で合致しない。埋土は堆積状況から、2 層に大別できると考える。下層はさらに細分可能だが、以下では一括しておく。上層（1 ~ 4 層）は、灰色系を主としたシルトや粗砂の互層からなる水成堆積層で、下層上面より掘り込まれるように堆積していることから、改修後の堆積層と考えられる。下層（5 ~ 14 層）も、同様な水成堆積層で、2 度以上の改修の可能性が想定される。土層の堆積状況からは、頻繁に浚渫を繰り返しながら、比較的長期にわたり使用されていた可能性が考えられる。

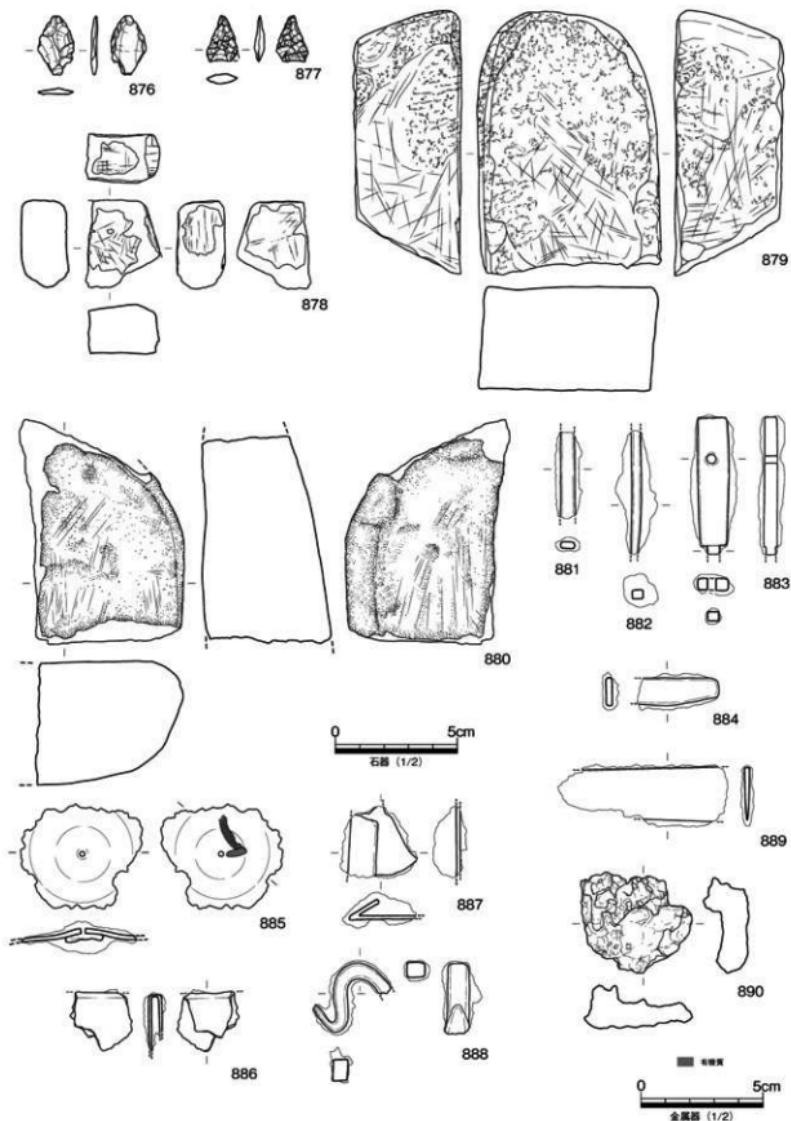
遺物は、弥生土器壺・壺・高杯、土師器壺、須恵器皿・杯・壺、土師質土器皿・杯・碗、黒色土器碗、



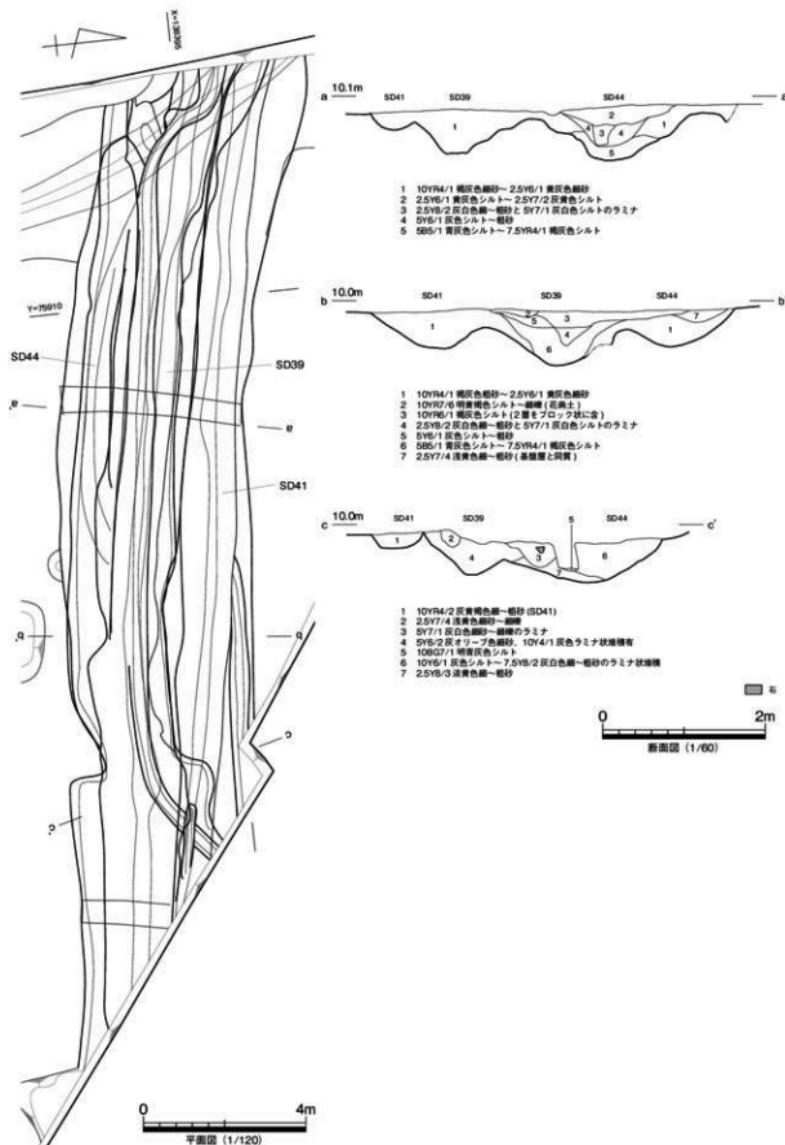
第120図 SD38出土遺物実測図1



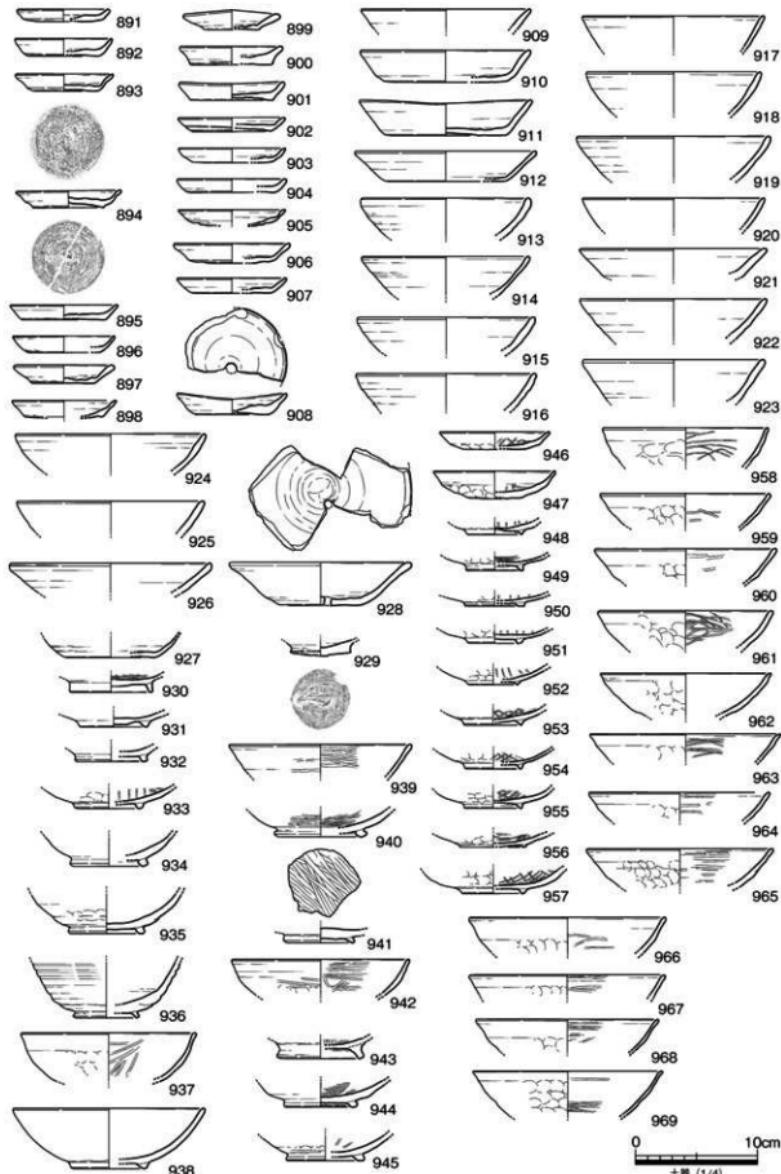
第121図 SD38出土遺物実測図2



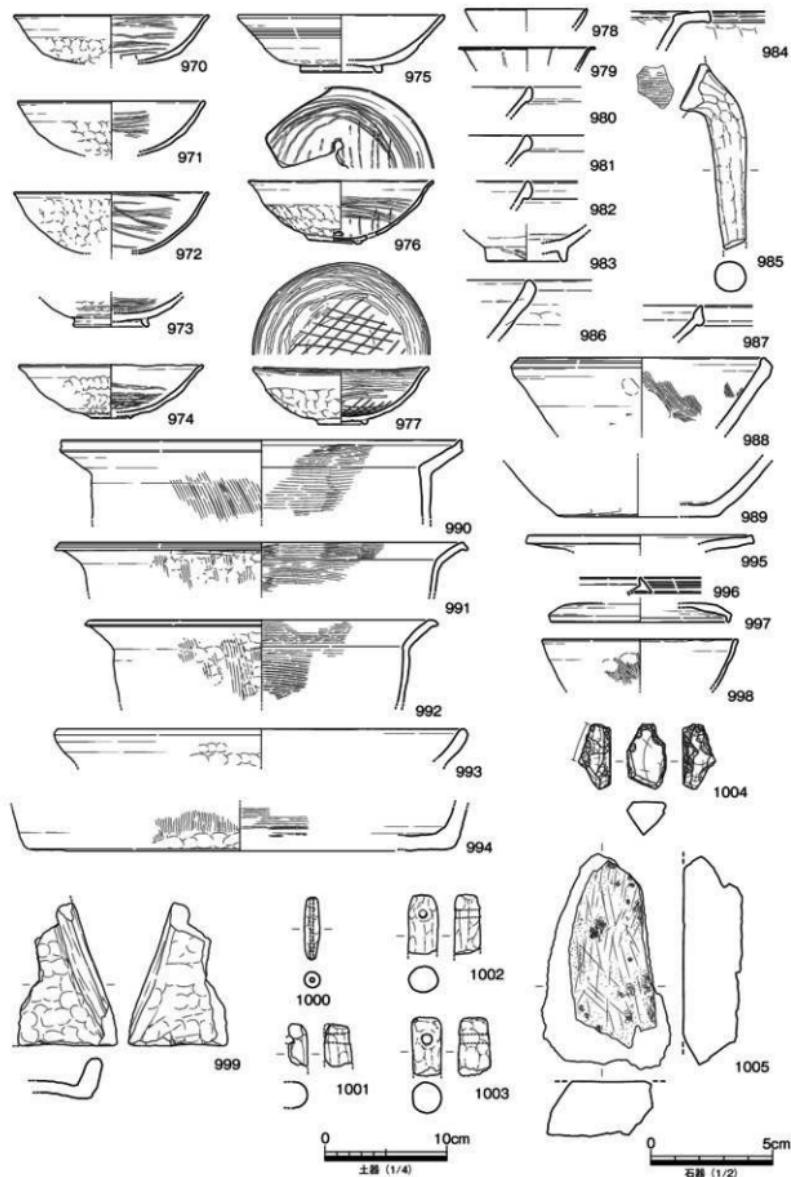
第122図 SD38 出土遺物実測図3



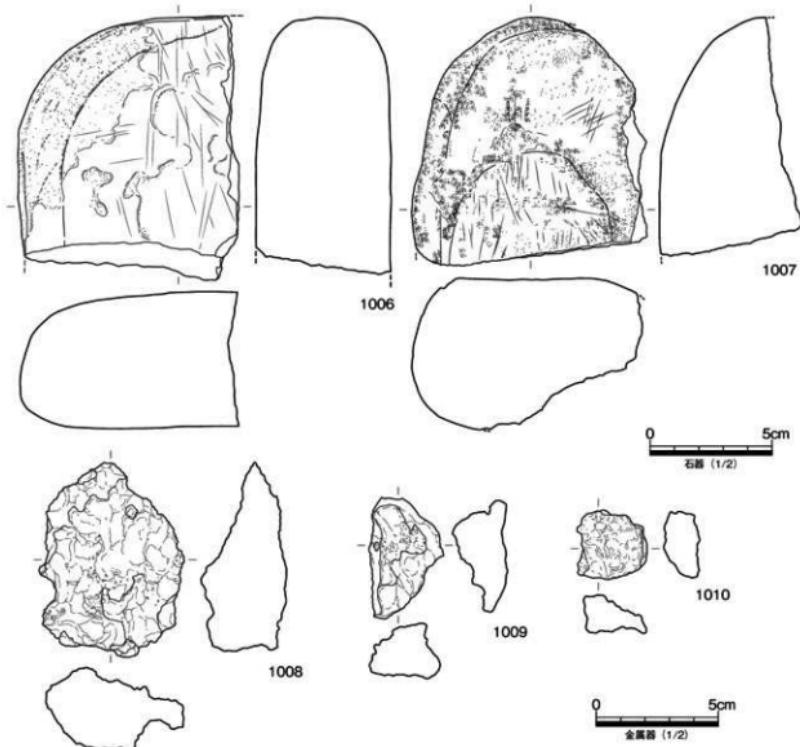
第123図 SD39～SD44 平・断面図



第124図 SD39出土遺物実測図1



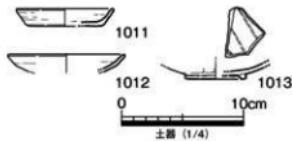
第125図 SD39出土遺物実測図2



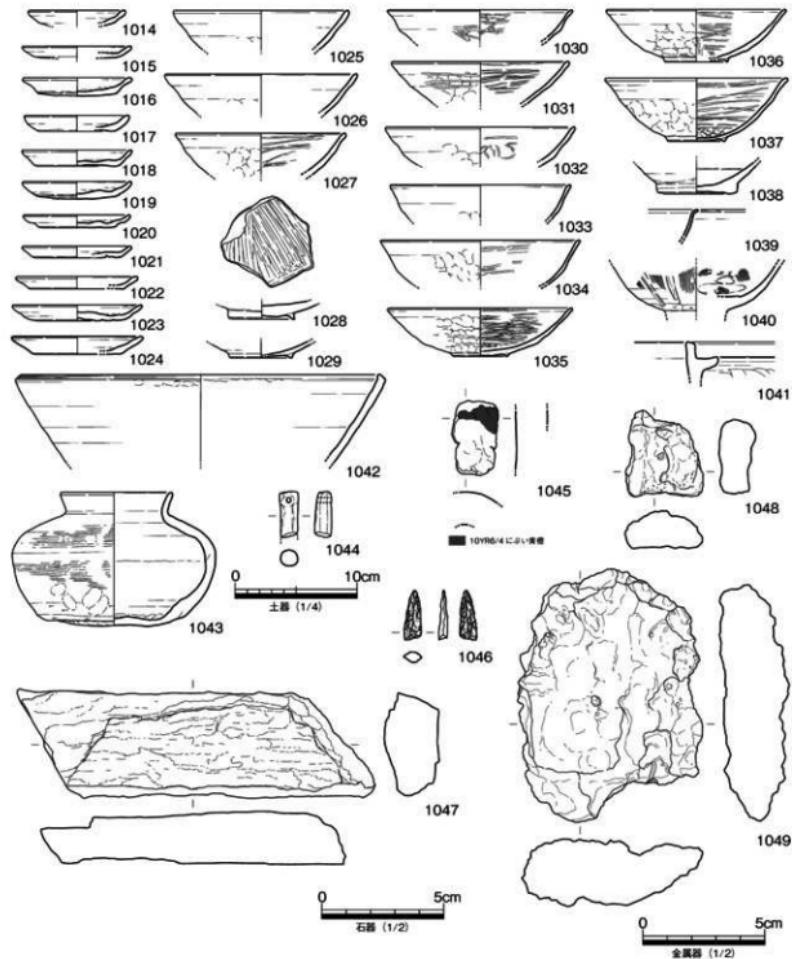
第126図 SD39出土遺物実測図3

瓦器皿・碗、平瓦等の小片のほか、サヌカイト製石鎌や楔形石器碎片、剥片、砂岩製砥石、鉄滓等がコンテナ約3箱と多量に出土した。798・852・854は最下層、793・806・845・848・849・851・853・854・861・874・878は下層、799・803・805・847は最終埋没土の最下層、855・876は地山再堆積層出土と記録されるが、各層が断面図のどの層に対応するかについては不明である。また、上記した以外の遺物についても、所属層位は不明である。

764～778は土師質土器皿である。771は内外面に煤が付着する。779は同高台付皿である。780～791は同杯。785も内外面に煤が付着する。786は胎土中に多量の雲母粒を含み、他地域からの搬入品の可能性がある。792～799は同碗である。792は内外面の調整が不明のため、杯となる可能性もある。800は黒色土器皿、801～810は同碗である。809は胎土中に角閃石粒を多量に含み、搬入品の可能性が高い。811は十瓶山周辺産の須恵器碗である。812は瓦質焼成の皿で、本地域では頗る出する器種で

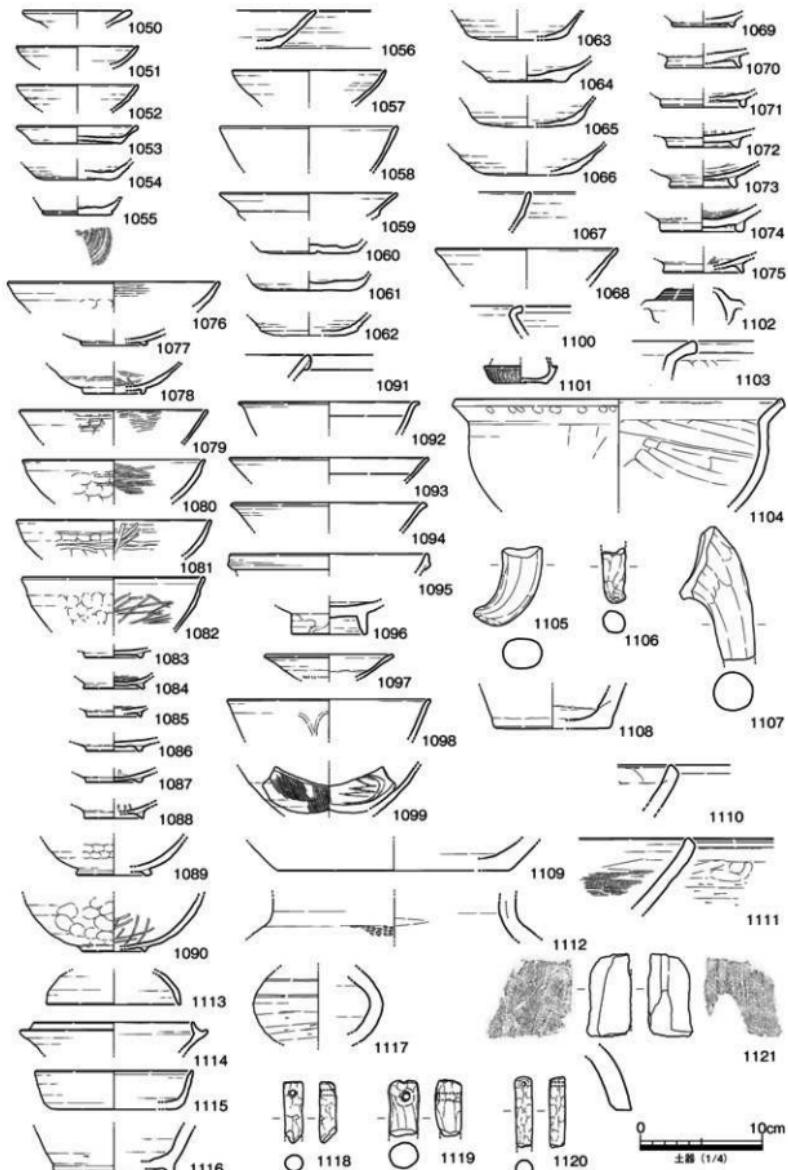


第127図 SD41出土遺物実測図

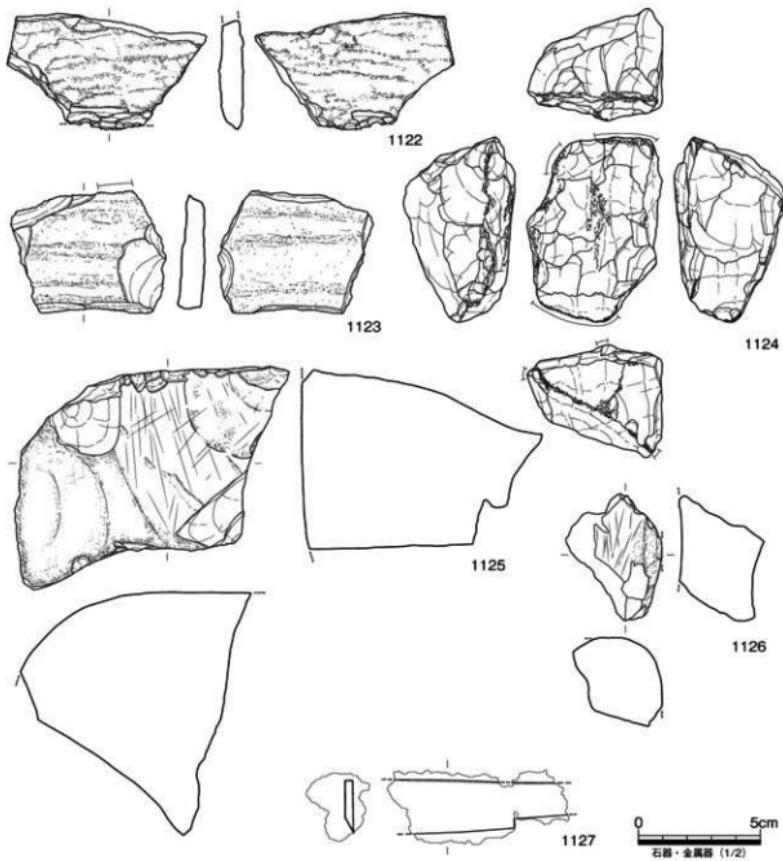


第128図 SD42出土遺物実測図

はない。813～816は和泉型瓦器皿、817～835は同碗である。いずれも炭素の吸着が不良な資料が多い。尾上編年Ⅱ期後半～Ⅲ期の資料であろう。836は白磁碗Ⅳ類、837は龍泉窯系青磁Ⅰ～2類碗、838は口縁部が輪花となることから同Ⅰ～4b類碗であろう。839は越州窯系青磁Ⅰ～2類碗である。内面見込みに橢円形の目跡を認めるが、外面には目跡はない。また、高台外側を斜めにカットしている。840は東播系須恵器片口鉢の口縁部小片。森田編年Ⅶ期に位置付けられる。841は土師質土器鍋で、外面には使用時の煤が付着する。842は同足釜の脚端部片である。843は、孔径3.0～3.7cmの円筒状を呈す



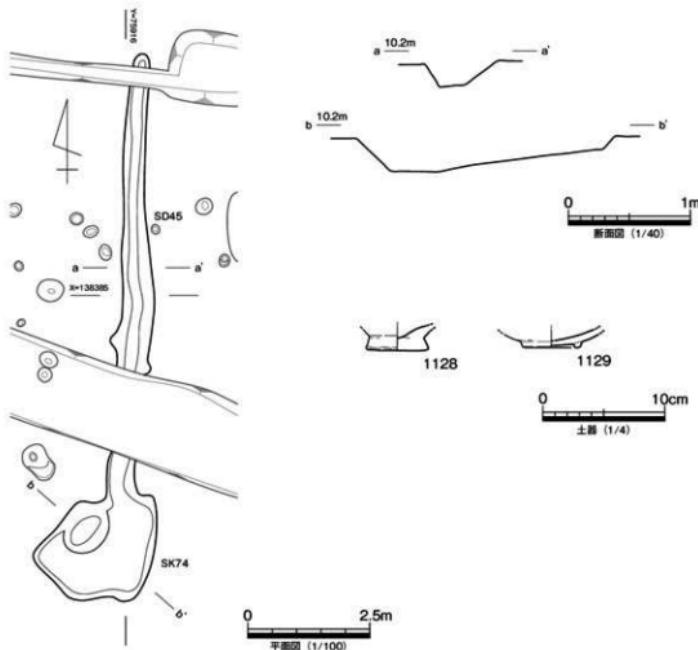
第129図 SD44出土遺物実測図1



第130図 SD44出土遺物実測図2

る土師質焼成のフイゴ羽口である。外面は被熱により黒化し、一部発泡、ガラス化した部位を認める。844は十瓶山周辺窯産の須恵器壺の口縁部小片である。

845～857は、弥生土器や古代以前の土師器、須恵器で、いずれも混入資料である。856は8世紀代の畿内系を指向した土師器杯で、外面は入念にミガキ調整を施すが、器形などに在地色が強くみられる。858～861は土師器甕。鈍く端部を摘み上げる860等は、10世紀代に遡る可能性がある。862・863は同羽釜である。864～869は棒状ないし管状土錐である。870～875は瓦類で、872・874等古代に属する混入資料を含む。876・877はサヌカイト製打製石錐。878～880はいずれも砂岩製の砥石である。878は大きく破損しているとみられるが、残存4面を使用する。879は円礫を板状に荒削りして砥石として使用したもので、3面に使用痕を認める。これら砥石はいずれも、煤の付着や被熱による変色を蒙る。



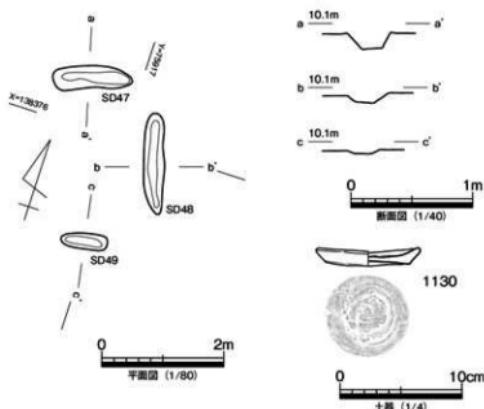
第131図 SD45 平・断面・出土物実測図

881～888は鉄製品である。881は断面形が扁平な板状を呈しており、鍔か鉗の可能性が考えられるが断定はできない。882・883は角釘である。884は刀子の茎と考え図示した。885は中央がやや膨らんだ盛蓋状の容器蓋か、紡錘車の可能性を考える。中央部に径2～3mmの円孔が穿たれ、孔部内面には紐状の有機質が付着する。886はコの字状に強く折り曲げられた鉄器小片で、刀装具（資金具や鍔金）の可能性が考えられる。887も端部を折り返した小片で、鍔・鍔先とみられる。888はフック状を呈する鉄製品だが、用途は不明である。889は短刀か刀子の切先の可能性を考え図化した。890は鉄滓である。

さて、本溝の時期であるが、最下層出土とされる861を評価すれば、その開削時期は11世紀中葉前後となるが、資料数も乏しく混入の可能性が高い。土師質土器類や825等の瓦器碗、十瓶山窯製品等より、12世紀後半に開削され、13世紀前葉にかけて機能していたと考えたい。また、841等の一部時期の新しい資料については、小片でもあり混入の可能性が高いと判断した。

SD39 (第123～126図)

3区中央部で検出した東西溝である。概ねN 81.8°Wに配され、東西両端は調査区外へ延長する。重複関係より、SD38より後出す。また、SD40～SD44と複雑に重複する。調査時には、各溝の重複関係について明らかにできていない。東西両端は調査区外へ延長し、各溝約23.0mを検出した。土層の堆積状況は第123図のとおりである。



第132図 SD47・SD48・SD49 平・断面・出土遺物実測図
わゆる円盤高台を有する土師質土器碗である。12世紀後葉か。930～938は土師質土器碗。12世紀後葉か。939～941は黒色土器碗。12世紀中葉前後。942～945は十瓶山周辺窯産の須恵器碗である。946・947は和泉型瓦器皿、948～961・963～974・976・977は同碗である。976の底部付近には、908・928と同様な、径0.8cmの円孔を焼成前に穿孔する。12世紀中葉～13世紀前葉。962・973・975は地方産の可能性もある瓦器碗。炭素の吸着は、磨滅によりほとんど残存していない。11世紀後半～12世紀前葉前後とみられる。979は白磁皿IV-2 b類である。980～982は白磁碗IV類、983は同皿-1類である。984・991～993は土師質土器鍋口縁部小片。991と992は接合しないが、同一個体の可能性が高い。993は胎土中に黒雲母粒を一定量含み、搬入品の可能性がある。985は同足釜の脚部破片。987は東播系須恵器片口鉢の口縁部小片。12世紀末～13世紀前葉。986・988は瓦質土器鉢口縁部、989は同底部片である。986・989は御目が確認できないが、擂鉢となる可能性がある。994は土師質土器火鉢の底部片と思われる。995～999は古代以前に属する混入資料である。998は外面ミガキ調整が施される、粗製の土師器杯である。内外面ベンガラにより赤色塗彩される（第4章参照）。999は移動式竈の焚口部の小片。1000～1003は土師質の管状ないし棒状土錐である。

1004は赤色珪質岩製の火打石である。側縁2箇所に顕著な使用痕を認める。1005～1007は細粒砂岩製の砥石。いずれも図上面に顕著な使用痕を認める。また、いずれも破損しており、1005・1006は別の用途に転用されたのか、被熱を蒙る。1008～1010は鉄滓である。

上記した出土遺物のうち、976・977等の瓦器碗や十瓶山窯産の須恵器碗等より、13世紀前～中葉の埋没の可能性を考える。また、既述したSD38との重複関係より、SD38埋没直後に本溝が開削（12世紀後葉～末）されたとすれば、比較的短期間で廃絶したものと考えられる。

SD41（第123・127図）

3区中央部で検出した東西溝である。既述したように、SD39等との重複関係については、明らかにできていない。

遺物は、弥生土器、土師器壺、須恵器、土師質土器皿・杯・碗、黒色土器、瓦器皿・碗、瓦質土器鉢・壺、東播系須恵器、白磁碗等の小片のほか、サヌカイト剥片、砥石、結晶片岩剥片がコンテナ15箱と多量に出土した。各遺物について層位別の取り上げはなされていない。

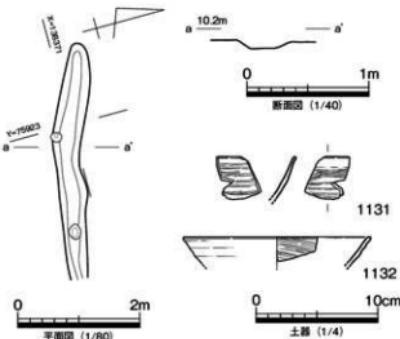
891～908は土師質土器皿。908は底部中央付近に、径0.7cm程度の小円孔を焼成前に穿つ。909～928は土師質土器杯。928も、底部中央付近に径0.6cmの小円孔を焼成前に穿孔しており、いずれも祭祀に用いられた儀器であろう。929は、い

遺物は、土師器甕、土師質土器皿、瓦器、須恵器等の小片が約20点出土したのみである。1011・1012は土師質土器皿、1013は和泉型瓦器碗である。

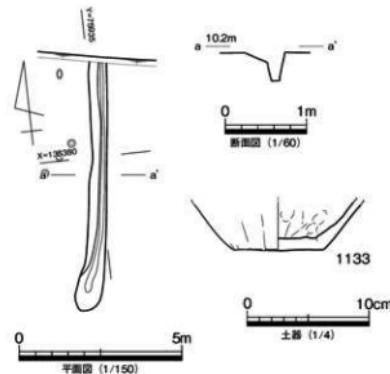
SD42（第123・128図）

3区中央部で検出した東西溝である。既述したように、SD39等との重複関係については、明らかにできていない。

遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器等の小片がコンテナ1/3箱程度出土した。1014～1024は土師質土器皿、1025～1029は同碗である。1028の内面は黒化しており、黒色土器となる可能性もある。1030～1037は和泉型瓦器碗である。下限は尾上編年Ⅲ期前半と考える。1038は白磁碗IV-1類か。1039は同安窯系青磁碗IIもしくはIII類の口縁部小片。1040は同青磁小碗I類と思われる。1041は土師器羽釜。11世紀前半に属し、混入資料であろう。1042は土師質土器鉢。1044は棒状土錘である。1045は端部に被熱によるとみられる変色部がみられることから、フイゴ羽口とみられる。1043は土師器短頸壺。口縁部の一部を欠損する以外、ほぼ完形に復元される。9世紀末葉を大きく下るものではなく、SR01からの混入資料の可能性が高い。1046はサスカイト製石錐。1047は紅麻片岩片である。打製石庖丁の素材として搬入された可能性が考えられる。1048・1049は鉄滓で、1049は椀形滓である。



第133図 SD50 平・断面・出土遺物実測図

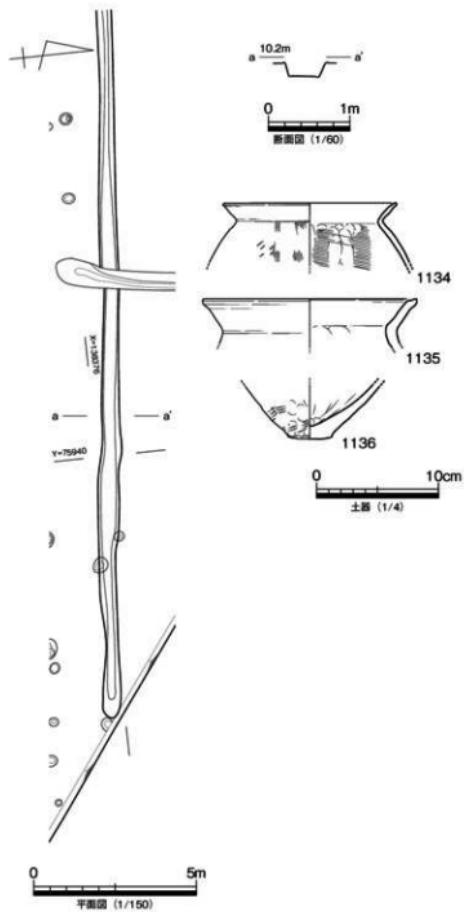


第134図 SD51 平・断面・出土遺物実測図

SD44（第123・129・130図）

3区中央部で検出した東西溝である。既述したように、SD39等との重複関係については、明らかにできていない。

遺物は、弥生土器、土師器高杯・甕、須恵器杯・甕、土師質土器皿、瓦質土器鉢、黒色土器碗、瓦器皿・碗、東播系須恵器捏鉢、白磁碗・壺、青白磁合子、土錘等の小片のほか、サスカイト剥片、鉄器等が、コンテナ1.5箱程度出土した。1050～1055は土師質土器皿。1055は底部糸切りとするもので、本遺跡では少数派であり、搬入資料と考える。1056～1066は同杯、1067～1074は同碗である。1075は黒色土器碗で、内外面黒化処理したB類碗である。1076～1078は十瓶山周辺窯産須恵器碗である。1079～1090は瓦器碗。大半は和泉型だが、1082は口縁部内面に浅い沈線が施され、樟葉型瓦

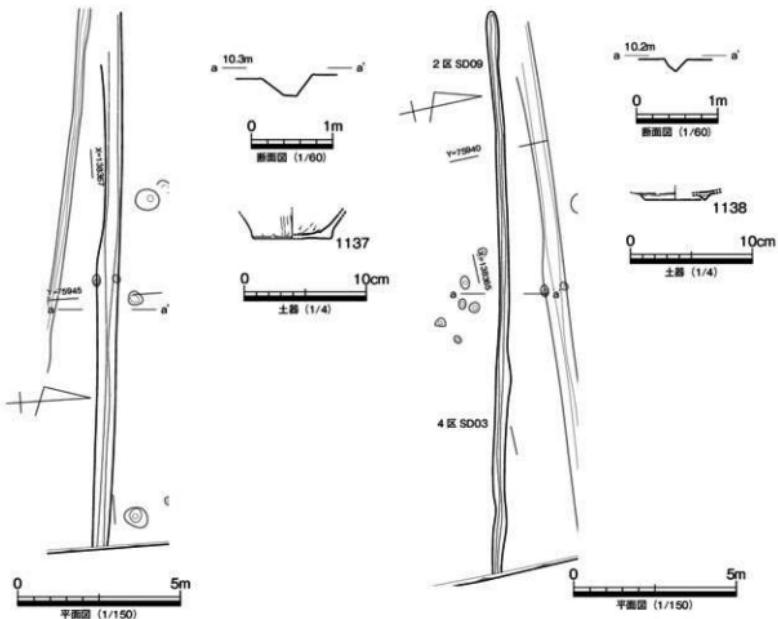


第135図 SD52平・断面・出土遺物実測図

遺構からの混入資料である。1110は畿内系土師器杯で、内面には赤色顔料が残る。1113は須恵器杯蓋、1114は同杯身、1116は同壺底部片、1117は同壺である。1115は土師器杯。内面はベンガラにより赤色塗彩される（第4章参照）。1118～1120は棒状土錘。1118とそれ以外とでは胎土が異なり、製作地を異にする可能性がある。1121は布目丸瓦片である。

1122は珪質片岩製の打製石庵丁片である。1123は同片岩の碎片で、上縁の一部に敲打痕がみられることから、打製石庵丁の破損品の可能性がある。1124は石英製火打石。側縁3箇所と上下周縁に顕著な使用痕を認める。1125は細粒砂岩製の砥石。砥面は1面のみ確認され、使用後に大きく破損し、ま

器碗の可能性がある。下限は尾上編年Ⅲ期前半か。1091～1101は輸入陶磁器で、1091・1095は白磁碗IV類、1096は同碗V類、1092・1094は同碗V-4類、1093は同碗V-2類と思われる。1098は龍泉窯系青磁碗IV類か。大宰府での出土は14世紀初頭から後半とされる。1099は同安窯系青磁碗I-1b類、1097は同青磁皿III-a類か。1100は褐釉陶器水注か耳壺の口縁部小片と思われる。1101は青白磁合子である。1102は瓦質焼成のミニチュア土器羽釜と考える。1103・1104は土師質土器鍋。1104は使用により、内外面に煤が付着し、体下半部は器壁が剥落する。1105は土師質土器火鉢の脚部と考えられる小片。断面長径3.2cm、短径2.4cmの長楕円形を呈し、下端は丸く尖る。1106も脚部の破片で、形状より火鉢等の脚部の可能性がある。1107は同足釜の脚部片である。1108は土師質土器の底部片で、器壁が厚く、内面に明瞭な粘土紐接合痕が認められることから、壺の可能性が考えられる。1109・1110は瓦質土器鉢。1109は、底面もナデ調整がなされており、火鉢となる可能性もある。1110は、口縁部の形状から擂鉢の可能性がある。14世紀代の資料であろう。1111は須恵器鉢口縁部片、1112は同壺片で、後者は十瓶山周辺窯産である。1110・1113～1121は古代以前に属する資料で、下層



第136図 SD53(左)・SD54(右) 平・断面・出土遺物実測図

た部分的に被熱痕を認める。1126は粗粒砂岩製の砥石。破損により小片化しているが、1面にのみ使用痕を認める。1127は、片刃の鉄製刀子の茎付近の小片と考え図示した。

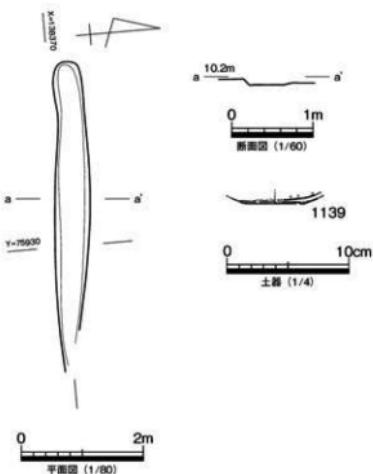
SD45（第131図）

1区中央北半部で検出した南北溝である。建物SB16と整った位置関係にあり、同建物の雨落ち溝となる可能性も考えられる。南端部は土坑状を呈し、北端は3区SD01南で途切れ、約11.1mを検出した。南端土坑状部は、東西2.4m、南北2.0mの不整形形を呈し、北東隅部が柱穴状にやや深く掘り込まれる。溝幅0.4～0.6m、残存深0.2m前後を測る。底面の標高は、南端部で9.98m、北端部で9.91mを測り、高低差より北へ流下していた可能性が考えられる。埋土等は記録化されておらず不明である。

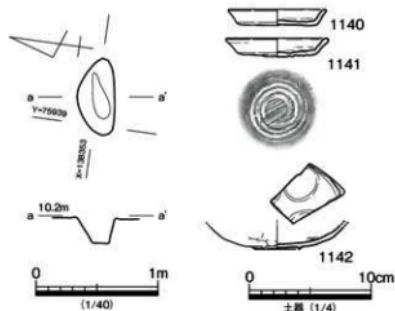
遺物は、土師質土器皿・杯・碗・壺・足釜、黒色土器碗、瓦器碗等の小片が120点程度出土した。1128は、いわゆる円盤状高台を有する土師質土器碗である。11世紀中葉に属し、混入資料の可能性がある。1129は瓦器碗とみられるが、焼成があまく、内外面磨滅が進む。器壁は厚く、地方産の可能性が考えられる。

SD47・SD48・SD49（第132図）

1区中央部で検出した方形区画溝である。西辺の溝を欠き、北・東・南の3辺を画し、各コーナー部は途切れる。各溝の検出長は、SD48は1.64m、SD47は1.30m、SD49は0.75mで、幅は約0.3mをそ



第137図 SD57 平・断面・出土遺物実測図



第138図 SD68 平・断面・出土遺物実測図

と重複し、切り合い関係より後出する。北端は調査区外へ延長し、南端は調査区内で途切れ、約7.6 mを検出した。検出面幅は0.41～0.74 m、残存深は0.27～0.53 mで、流路方向N 90° Eに配される。底面の標高は、北端部で9.84 m前後、南端部で9.60 m前後をそれぞれ測り、高低差より南へ流下している可能性が考えられる。埋土等に関する情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、弥生土器壺・鉢、須恵器、土師質土器杯、瓦器等の小片36点が出土した。出土遺物の大半は、本来は下層流路に帰属したであろう弥生時代から古墳時代前期の遺物が占める。1133は前期に属する弥生土器壺底部で、下層流路からの混入資料である。出土遺物より詳細な時期を特定することは困難であり、当該時期の遺構の可能性を指摘するにとどめる。

それぞれ測る。区画の規模は、南北長が溝芯々間で2.7 mであった。また溝底面の標高は、SD47が9.87 m、SD48が9.98 m、SD49が10.00 mと、SD47がやや深く掘り込まれる。各溝の埋土等は記録化されておらず不明である。

遺物は、SD48より器種不詳の土器小片1点、SD49より土師質土器皿等の小片2点が、それぞれ出土したのみである。1130は、SD49より出土した完形の土師質土器皿である。出土遺物が乏しく、詳細な時期を特定することは困難だが、概ね12世紀後半～13世紀前葉の遺構と考える。

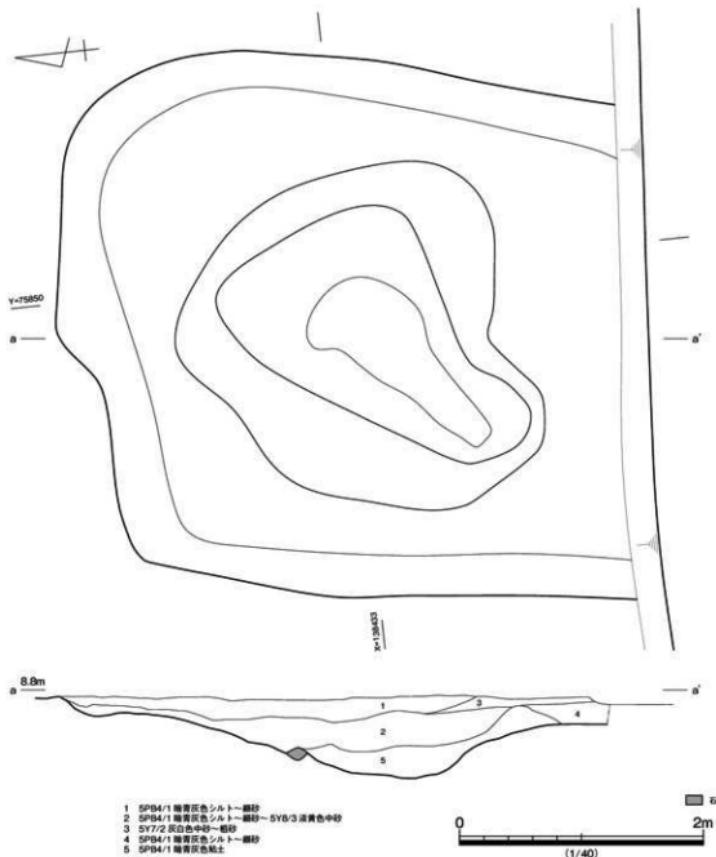
SD50 (第133図)

1区調査区東端で検出した東西溝である。西端は調査区内で途切れ、東端は調査区外へ延長し、0.74 mを検出した。検出面幅0.18 m、残存深0.04 mの浅い小溝である。埋土等は記録化されておらず不明である。

遺物は、須恵器、土師質土器皿・杯、瓦器碗等の小片が5点出土したのみである。1131は土師質土器碗。比較的丁寧にミガキ調整を施す。1132は和泉型瓦器碗口縁部小片である。尾上編年Ⅲ期前半に位置付けられるか。出土遺物が乏しいため詳細な時期を特定することは困難だが、12世紀後半～13世紀前葉の遺構と考える。

SD51 (第134図)

4区北端で検出した南北直線溝である。SD52

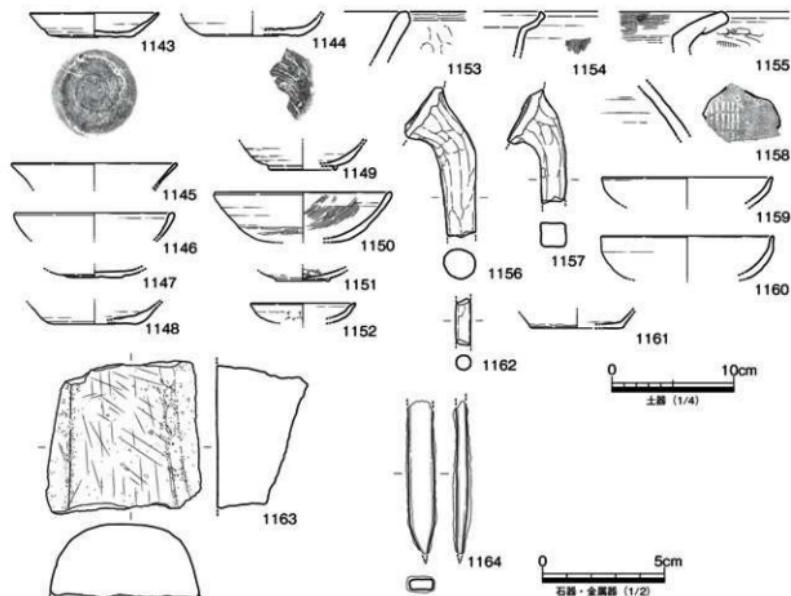


第139図 SX01 平・断面図

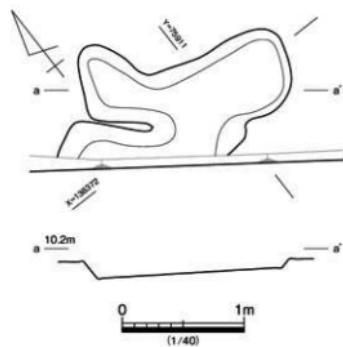
SD52（第135図）

4区北半部を東西走する直線溝である。東端は調査区界で途切れ、西端は隣接する1区で延長部が確認されず、約21.7mを検出した。SD51と重複し、切り合い関係より先行する。検出面幅0.34～0.59m、残存深0.07～0.11mで、流路方向N 84.5°Wに廃される。底面の標高は、東端部で9.99m前後、西端部で10.02m前後をそれぞれ測り、高低差に顯著な差は認められず、流下方向は特定できなかった。埋土等に関する情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、弥生土器甕・壺・鉢、黒色土器等の小片62点が出土した。出土遺物の大半は、本来は下層遺構に帰属したであろう弥生時代から古墳時代の遺物が占める。1134は弥生土器甕、1136は同鉢である。1135は古墳時代後期の布留系土器甕で、いずれも下層遺構からの混入資料である。出土遺物よ



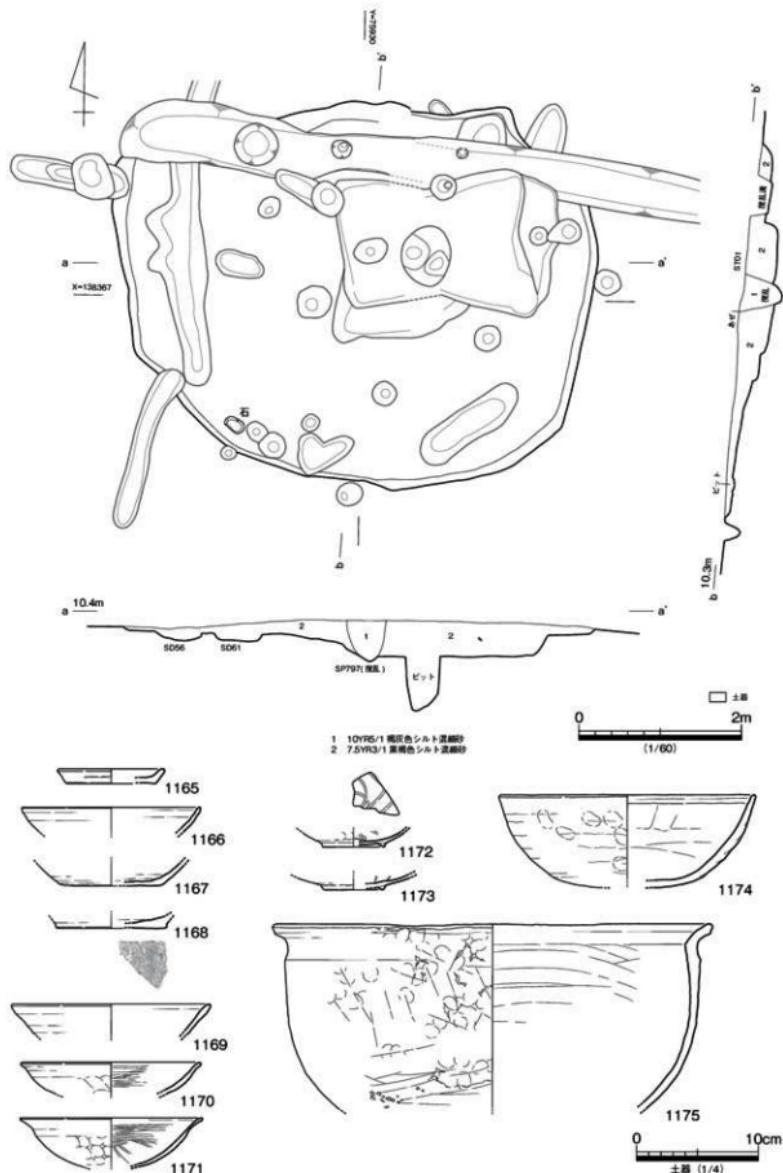
第140図 SX01出土遺物実測図



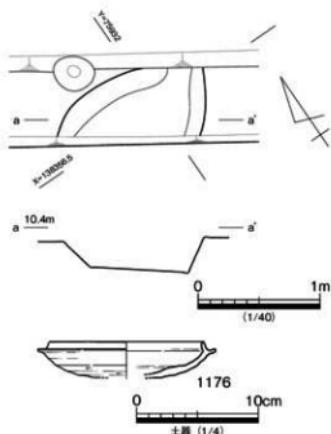
第141図 SX02平・断面図

報告が記録化されておらず、検証することはできなかった。なお両溝の間隔は、芯々間で約8.5mであった。

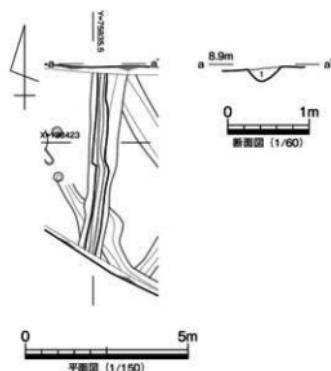
遺物は、弥生土器甕・壺・高杯等の小片69点が出土した。1137は弥生土器甕底部片で、香東川下流域からの搬入品である。出土遺物はいずれも古代以前に遡るが、周辺遺構との関係等より、当該時期の遺構として報告する。



第142図 SX03 平・断面・出土遺物実測図



第143図 SX04 平・断面・出土遺物実測図



第144図 SD19 平・断面図

SX03より後出する。南北両端は調査区内で途切れ、延長1.78mを検出した。検出面幅0.2m前後、残存深0.03m前後、流路方向N 22.31°Eを測る。埋土等に関する情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、土師質土器皿や瓦器碗等の小片7点が出土したのみである。1140・1141は土師質土器皿である。1141は完形品で、1140も一部を破損する程度。意図的に遺構内へ埋置した可能性が考えられる。1142は和泉型瓦器碗。尾上編年Ⅲ期後半時代の資料で、時期的に土師質土器と矛盾しない。出土遺物より、13世紀前葉を上限とする遺構と考える。

性格不明遺構

SX01 (第139・140図)

SD54 (第136図)

2区北端から4区南西隅部を東西走する溝である。東端は調査区外へ延長し、西端は調査区内で途切れ、約17.4mを検出した。検出面幅0.2~0.45m、残存深0.07~0.23mを測り、流路方向は概ねN 78.03°Wに配される。底面の標高は、西端で993m前後を、東端で10.10m前後をそれぞれ測り、高低差より西へ流下していたと考えられる。埋土等の情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、弥生土器、須恵器、土師質土器皿・杯・碗、瓦器皿・碗等の小片約120点のほか、サスカイト剥片1点が出土した。本来は下層流路に帰属したであろう弥生時代から古墳時代の遺物が過半を占める。1138は和泉型瓦器碗であろう。尾上編年Ⅲ期後半前後の資料とみられ、13世紀前葉を上限とする遺構と考える。

SD57 (第137図)

2区北端で検出した東西溝である。SX03と重複し、切り合い関係より後出する。東端は隣接する4区で延長が確認されず、西端は調査区内で途切れ、約4.7mを検出した。検出面幅0.5m前後、残存深0.06m前後で、流路方向N 86.06°Wに配される。埋土等の情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、土師質土器皿、瓦器碗等の小片15点程度が出土した。1139は和泉型瓦器碗の底部小片である。本資料も、尾上編年Ⅲ期後半前後の資料とみられ、13世紀前葉を上限とする遺構と考える。

SD68 (第138図)

2区南西部で検出した小溝である。切り合い関係より、SX03より後出する。南北両端は調査区内で途切れ、延長1.78mを検出した。検出面幅0.2m前後、残存深0.03m前後、流路方向N 22.31°Eを測る。埋土等に関する情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、土師質土器皿や瓦器碗等の小片7点が出土したのみである。1140・1141は土師質土器皿である。1141は完形品で、1140も一部を破損する程度。意図的に遺構内へ埋置した可能性が考えられる。1142は和泉型瓦器碗。尾上編年Ⅲ期後半時代の資料で、時期的に土師質土器と矛盾しない。出土遺物より、13世紀前葉を上限とする遺構と考える。

7区南東隅部で検出した大型の土坑状を呈する落ち込みである。南半部は調査区外へ延長するため、全形は不詳。東西4.40m、南北4.6m以上、平面形はやや歪な隅丸方形を呈するとみられる。残存深は0.68mを測り、断面形は碗底状を呈する。埋土は5層に細分され、上位4層は灰～黄色系シルト～砂層が堆積し、遺構機能停止後のベース層流入土とみられる。遺構底面にはグライ化した暗青灰色粘土が0.25m以上の層厚で堆積しており、漏水状態にあった可能性が考えられる。

遺物は、弥生土器や須恵器、黒色土器、土師質土器皿・杯・碗・足釜・鍋、瓦器碗、棒状土錐等の小片のほか、サヌカイト剥片や鉄釘等がコンテナ1/4箱程度出土した。層別に取り上げられていないため、遺構機能時の遺物を抽出することはできない。1143は土師質土器皿で、完形に近く復元される。1144～1148は同杯。1147の外底面は糸切り調整であり、本遺跡では少数派である。搬入品の可能性がある。1149は同碗。内外面

第145図 SD27 平・断面・出土遺物実測図の一部に煤が付着した可能性がある。1150は十瓶山周辺窯産の須恵器碗。佐藤編年中世II-2期前後に位置付けられる。1152は和泉型瓦器皿。1151は同碗である。尾上編年Ⅲ期前半か。1153は土師質土器鉢として図化した。端面には浅い沈線を認める。1154・1155は同鍋。1154の外面には使用時の煤が付着する。1155は胎土中に多量の黒雲母粒を含み、搬入品の可能性がある。1156・1157は同足釜の脚部。1157の脚部断面は矩形を呈し、本地域では主体とはならない。1158は常滑焼壺もしくは壺の体部である。本遺跡で確認できた唯一の常滑製品である。13世紀中葉前後か。1159は土師器皿、1160は同杯。1161は須恵器杯。これら3点は古代に通り、下層遺構からの混入資料である。1162は両端を欠損する、土師質の棒状土錐である。胎土中に角閃石や黒雲母粒を含み、搬入品の可能性がある。

1163は方柱状の砂岩亞円礫を使用した砥石で、現状で1面のみ使用痕を認める。1164は用途不明の鉄製品で、鑿の可能性を考える。

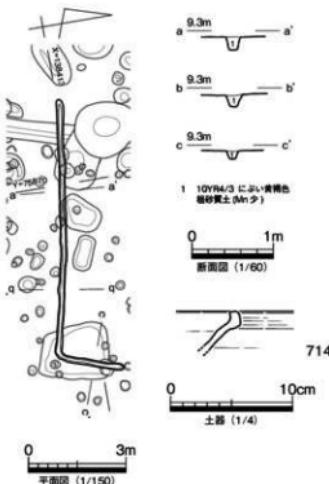
SX02（第141図）

1区中央南端で検出した不定形遺構である。南半部は調査区外へ延長する。東西約1.7m、南北0.75m以上、残存深0.18mを測る。平面形状より複数の遺構の重複の可能性も考えられるが判然としない。埋土等に関する情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、弥生土器、須恵器、土師質土器皿・鍋、瓦器碗等の小片が25点出土したのみである。出土遺物より詳細な時期を特定することは困難であり、当該時期の遺構の可能性を指摘するにとどめる。

SX03（第142図）

2区北東部で検出した落ち込みである。SD59と重複し、切り合い関係より先行する。平面形は、南北4.6m、東西5.75mの不整な方形を呈する。残存深0.45mで、断面形は底面に起伏が多く、安定した形状



を呈さない。埋土は、黒褐色シルト混り細砂の単層であったが、平・断面形状より、底面で検出した遺構を含めて、複数の遺構の重複の可能性が考えられる。

遺物は、弥生土器甕・高杯、須恵器杯、土師質土器皿・杯・足釜、瓦器皿・碗、平瓦等の小片、サヌカイト剥片、砂岩被熱礫が、コンテナ半箱程度出土した。**1165**は土師質土器皿。**1166～1168**は同杯。**1168**は底部糸切りされ、搬入品の可能性がある。**1169**は十瓶山周辺窯産須恵器碗。佐藤編年中世Ⅱ～2～Ⅲ期か。**1170～1173**は和泉型瓦器碗である。尾上編年Ⅲ期後半代の資料であろう。**1174**はボウル状を呈する瓦質焼成の鉢である。**1175**は土師質土器鍋で、体部外面には使用による煤が付着する。出土遺物より、13世紀前半代を上限とする遺構と考える。

SX04（第143図）

2区中央南端部で検出した落ち込みである。南半部は調査区外へ延長し、北端部は試掘トレーナによつて壊され、全形は不明である。現状で、東西 1.14 m、南北 0.55 m 以上、残存深 0.23 m、平面形はやや歪な橢円形を呈するとみられる。埋土等に関する情報は記録化されておらず不明である。

遺物は、弥生土器や須恵器の小片約 20 点が出土した。**1176**は 6世紀後半代の須恵器杯身で、下層遺構からの混入資料である。出土遺物より詳細な時期を特定することは困難であり、当該時期の遺構の可能性を指摘するにとどめる。

近世

溝

SD19（第144図）

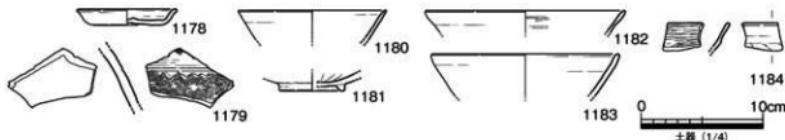
9区西端部で検出した南北溝で、両端は調査区外へ延長する。5.47 m を検出した。近世以降の旧耕土もしくは床土層とみられる橙～灰色細砂～シルト層上面より掘り込まれており、検出面より近世以降の所産と考える。検出面幅 0.27～0.38 m、残存深 0.1～0.17 m、流路方向は中位で屈曲するもののおおよそ N 41°W とほぼ正方位に配され、断面形は U字状を呈する。埋土は灰色シルトと灰白色中～細砂がラミナ状に堆積していた。

遺物は、弥生土器や土師質土器皿等の小片 7 点が出土したのみである。

SD27（第145図）

10区東端から 8区西端第1面で、L字状に配された区画溝である。両端は調査区内で途切れ、東西溝延長約 7.8 m、南北溝延長約 2.0 m をそれぞれ検出した。流路方向は、東西溝 N 79.84°W、南北溝が N 18.03°E をそれぞれ測り、両溝の内角 97.9° と直交はしない。溝は、検出面幅 0.15～0.20 m、残存深 0.10～0.16 m を測り、底面は概ね平坦で、断面形は箱形を呈する。埋土はにぶい黄褐色粗砂質土の単層であった。流水痕跡は認められなかった。

遺物は、弥生土器や須恵器、土師質土器皿・杯、瓦器、東播系須恵器片口鉢等の小片約 100 点のほか、鉄滓 2 点が出土した。**1177**は東播系須恵器片口鉢口縁部小片である。出土した遺物は中世以前に属するが、検出遺構面より当該期の遺構の可能性を考える。



第146図 遺構不明の遺物実測図

出土遺構不明の遺物（第146図）

1178・1179は9区SK11、1180は10区SK11、1181～1184は1区SK05として取り上げたが、各遺構の位置が記録されておらず、出土遺構が不明の遺物である。実測図のみ掲載する。

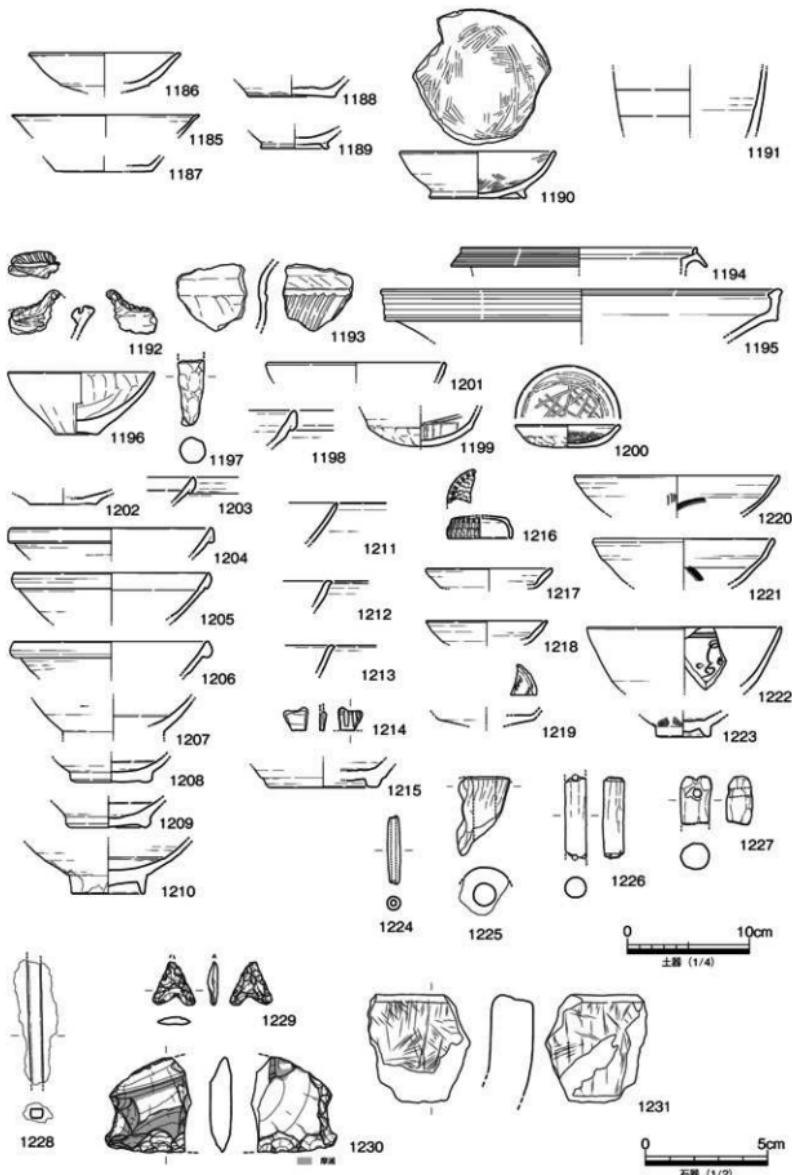
遺構外出土の遺物（第147・148図）

第147・148図に掲載した資料は、遺構に属さない包含層や遺構検出時等に出土した遺物である。輸入陶磁器等を中心に、とくに必要と思われる資料を図化・掲載した。

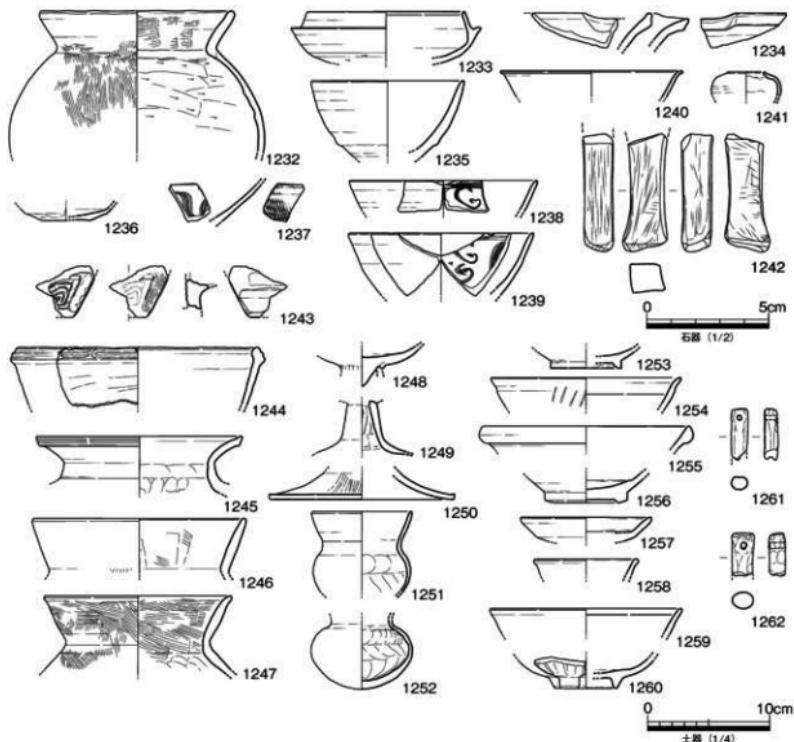
1185は11区床土層出土の須恵器皿の口縁部小片である。1186～1191は、11区第2面包含層出土の遺物である。1186は土師器高杯の杯部小片である。1187は須恵器杯で、古代以前に遡るこれら2点は、下位遺構からの混入資料であろう。1188は土師質土器杯。1189・1190は黒色土器碗である。1191は古瀬戸の壺。

1192～1231は1～4区包含層等出土の遺物である。1192・1193は縄文時代後期の遺物。1192は波状口縁の内面を肥厚し、端部に沈線を主とした文様を施す深鉢である。1193は浅鉢としたが深鉢となる可能性もある。1194～1196は弥生時代中～後期の土器で、以上の資料は下位遺構からの混入資料であろう。1194は、口縁部外面をベンガラにより赤色塗彩する（第4章参照）。1197は土師質土器足釜脚部片。1198は東播系須恵器片口鉢の口縁部小片。1199・1200は和泉型瓦器皿で、1200はほぼ完形品である。1201～1223は輸入陶磁器。1201は白磁碗II-3類等の可能性が考えられるが、小片のため断定できない。1202は、釉が黄味を帯びることから、白磁碗VI-1類と思われる。1203～1206・1209は白磁碗IV類、1207は同IVないしV類、1208は同IV-1類、1210は同V類、1211は同II-4類、1212・1213は同V-4類もしくはVII-1類であろう。1214は器種不詳の磁器小片。1215は褐釉陶器の水注か壺の底部小片。1216は青白磁合子の蓋である。1217は同安窯系青磁碗I類。1218は龍泉窯系青磁碗I-2類。1219は龍泉窯系青磁碗I-1類。1220は同安窯系青磁碗I-1b類。1221は同碗I-1a類と思われる。1222は龍泉窯系青磁碗I-4類。1223は同安窯系青磁碗I-1b類の底部片である。1224は管状土錐で、1225は瓦質焼成の大型管状土錐として図化した。瓦質焼成の土錐は本例が当遺跡で唯一である。1226・1227は棒状土錐である。1228は鉄釘とみられる鉄器残欠。1229はサスカイト製の打製石錐。1230は同打製石砲丁である。1231は滑石製石鍋の口縁部小片で、温石として利用された可能性がある。

1232～1243は5～7区出土の遺物である。1232は布留系の土師器甕、1233はMT15型式併行期とみられる須恵器杯身である。これらは下位の遺構からの混入資料であろう。1234は東播系須恵器片口鉢の口縁部小片。1235は古瀬戸天目碗である。1236は龍泉窯系青磁碗I-1a類。1237は同安窯系青磁碗I-1b類。1238・1239は龍泉窯系青磁碗I-4類である。1240は白磁碗VII-1類もしくは3類。1241は白磁壺。被熱のためか釉に変色部分を認める。1242は石材不明の砥石で、4面が使用



第147図 包含層等出土遺物実測図1



第148図 包含層等出土遺物実測図2

されている。また破損後の被熱により、煤の付着や変色が認められる。1243は軒平瓦瓦当部の小片である。

1244～1262は9・10区出土の遺物である。1244は縄文土器深鉢である。口縁端部を上下に拡張し、端面に沈線で区画文を描く。1245は弥生土器広口壺、1246・1247は布留系の土師器甕、1248～1250は同高杯、1251・1252は、同小型丸底土器である。1253は緑釉陶器碗。1254は白磁碗V-2b類。1255は同碗IV類。1256は同碗IV-1類。1257は龍泉窯系青磁皿I類。1258は同杯と思われる。1259は同碗I類。1260は同碗II類である。1261・1262は土師質の棒状土錐である。